

宮部鼎蔵年譜	
文政3年 (1820)	4月、益城郡木倉手永南田代村（現御船町上野地区茶屋本）に父・春吾、母・ヤソの長男として生まれる。
文政11年 (1828)	熊本城下の叔父・野村伝衛門の家にあずけられ文武の道を習う。
天保4年 (1833)	富田龍陽に入門、医を学ぶ。
天保8年 (1837)	富田龍陽門を卒辞。藩の兵学師範役、宮部丈左衛門に就きて学ぶ。野村家を出て叔父・宮部丈左衛門家に移る。
天保10年 (1839)	叔父・丈左衛門に就いて兵学研さん。故郷にて弟・春蔵が生まれる。
嘉永2年 (1849)	中尾えみと結婚。家を熊本内坪井に構え、子弟教育に従事する。
嘉永3年 (1850)	9月、肥後藩の兵学師範となる。
嘉永4年 (1851)	6月、吉田松陰と房総地方を旅し、房相旅行記をまとめ沿岸防備図を作成。さらに12月から東北地方を5ヵ月旅し、海防や兵学の研究にあたる。
嘉永6年 (1853)	国学者・林校園の原動館に入り国学古典の研究を深める。なお、この年6月、米国のペリー艦隊が黒船で浦賀に来航し開国を迫る。
安政2年 (1855)	6月、鼎蔵の弟・春蔵が門弟らと水前寺を散策中、同藩士といさかい。春蔵、3年の獄刑。鼎蔵は弟の罪で師範を免ぜられ南田代村へ帰郷する。
文久元年 (1861)	12月、出羽の清川八郎らが来熊。これを転機に肥後や京で尊皇攘夷の運動に活躍する。
文久3年 (1863)	8月、京の政変で肥後勤王党は長州と行動し七卿とともに長州へ落ちる。
元治元年 (1864)	6月、京の三条小橋の池田屋で同志20数名と会談中に近藤勇率いる新撰組に襲われて自刃。45歳。



宮部鼎蔵生誕碑が自宅庭にある
牧鶴 文雄 さん
(上野・68歳)

石碑には、朝からお茶や水のお供えを上げ、はわき掃除や草取りをして、きれいに保つようになっています。時折、歴史に興味のある方が石碑を見学に訪れることもあります。なかには遠く山口や福岡など、県外からも見られます。



↑「宮部鼎蔵生家跡」を示す石碑(牧鶴文雄さん宅の敷地内)。大正3年11月建。碑の左側後方には、鼎蔵が出生のときに産湯として使われたと言い伝えられる井戸が残っている。

●用語解説

- 〔郡代〕…徳川幕府の直轄地を幕府に代わって治めた職。
- 〔兵学〕…戦う方法を研究する学問。
- 〔師範〕…学問や技術を教える先生。
- 〔藩士〕…江戸時代、諸侯の領地を治めた組織。
- 〔藩士〕…大名のけらいである武士。
- 〔勤王党〕…徳川幕府を倒し、天皇政治をおこそうとした思想。
- 〔尊皇攘夷〕…皇室をとうとび外国人をうちはらおうとした思想。

⇒ 佐幕開国

勤王の志を共にした二人

鼎蔵が21歳の時、叔父・宮部丈左衛門の養嗣子となります。丈左衛門は、学問や山鹿流の兵学を学び、肥後藩の兵学師範に就いた人物です。丈左衛門から兵学を学んだ鼎蔵は、30歳の時、跡を継いで肥後藩の兵学師範に就き、熊本城下の内坪井で子弟の教育にあたります。

このころから鼎蔵は、その後の人生を大きく左右する二人の偉大な人物と親交を深くしていきます。

まずそのひとり、長州藩（山口県）の吉田松陰でした。嘉永5年（1852）に、松陰と共に東北諸藩を遊歴。諸国の志士と交友し、尊皇攘夷の信念を深くします。松陰が渡米の決意を明らかにした際には、時期尚早と冒険を危ぶみ、志をひるがえさせようと努めます。しかし、決意の固い松陰を察して、自分の愛刀と藤崎八幡宮の神鏡を贈り、「鬼神のまことの道をかしこみて思ひつつゆけ思ひつつゆけ」の一首を与えました。

次にもう一人が、国学者・林校園です。校園の原動館に入門して、国学古典の研究にあたります。そこで鼎蔵は勤王の思想をさらに深め、当時の肥後藩内にあった勤王党の中心人物となつて統率を図るなど、次第に頭角をあらわしていきます。そんな折、ある事件が起こります。

安政2年（1855）2月、鼎蔵の弟・春蔵（名Ⅱ大助）が門弟らと水前寺公園を散策中、熊本藩士といさかいを起こします。春蔵は3年の獄刑を命ぜられ、鼎蔵にも春蔵の罪で師範を免ぜられ、南田代村へと帰郷したのです。

ここでいったんは、歴史の表舞台から退いたかにみえた鼎蔵でしたが、この後再び数奇な運命に引き寄せられていくのです。



↑宮部鼎蔵の肖像。画を手がけたのは総庄屋・光永平蔵の孫・光永眠雷。代々、旧上野小学校で丁重に保管されていた（七滝中央小学校所蔵）。

文武両道で親孝行な鼎蔵少年

文政3年（1820）4月、益城郡木倉手永南田代村（現上野地区茶屋本）に、父・春吾、母・ヤソの間に宮部家の長男・鼎蔵（名Ⅱ増実）が生まれました。

宮部本家は、肥後（熊本県）の藩主・細川氏初代から仕えた宮部市左衛門の由緒ある家系でした。その本家の知行地を頼つて南田代村に分家し、代々医を家業としていました。

鼎蔵9歳の時、祖母・楽に連れられて、熊本城下の叔父・野村伝衛門の家に預けられ、そこで文武の道を習います。野村家は細川藩士の家柄であり、楽は礼儀孝道を重んじていたため、鼎蔵は厳格な教育を受けま

す。毎日、朝早くから夜遅くまで学問や武芸の教えを受けて、稽古に励んでいたといえます。また家へ帰っては、楽の介抱やいつけを守り、眠る時間は4時間ほどでした。

鼎蔵が13歳になると、毎月5、6回は両親が暮らす南田代村まで里帰りをするようになります。その道のりは片道約24キロ。子どもの足で約6時間はかかったそうです。ある時、里帰りの途中、群見坂（現県道221号田代御船線）で眠りこんでしまった鼎蔵。その翌朝、近くを通った郡代が草むらに寝ている鼎蔵を発見して事の成り行きを聞きます。郡代は、親孝な行いと山の中に眠る肝っ玉の大きさに感心したそうです。鼎蔵のこうした暮らし方や行い

幕末の動乱の世にあつて
近代国家を夢みて奔走した
その男の名は…

宮部鼎蔵

時は江戸時代末期「幕末」――。200年以上続く徳川幕府に弱体化の陰りが見えはじめ、追い討ちを掛けるように米国のペリー艦隊「黒船」が浦賀に來航。そして開国を求めます。これを機に時代の波が大きく動き出したのです。そうした動乱のさなか、ここ御船の地から偉大な人物が歴史の表舞台へと歩んでいきます。その人物こそ「宮部鼎蔵」。彼が国のために奔走した45年の生涯を振り返り、現代に生きるわたしたちが今、考えるべきことに迫ります。

